『多数決を疑う 社会的選択理論とは何か』

坂井豊貴 岩波書店／岩波新書（新赤版）

本　　館	請求記号：X/081/I95V/1541	資料ID：701433732
神田分館	請求記号：X/081/I95V/1541	資料ID：701439994

商学部教授　赤城 諭士

これまでの人生のなかで多数決を使ったことがない人はいないでしょう。小学生の頃からクラスで何かを決めるときに、また友達同士で何かを決めるときに、何となく使ってきたのではないでしょうか。この多数決は、人々の意見（意思）をまとめて集団としての決定を行うための「集約ルール」として用いられます。ですが、多数決は集団で何かを決定するときの万能な集約ルールなのでしょうか。多数決を用いると常に多数派の意見が尊重されるのでしょうか。この本ではこうした疑問から出発し、多数決の抱える問題を指摘しています。そのうえで多数決以外の集約ルールについて、その歴史的な背景や特徴を分かりやすく紹介し、さらにどの集約ルールが優れているのか、その判断基準は何かについて検討していきます。また、憲法改正には何％の賛成が必要かといった問題や周波数オークションの話など、興味深いトピックも紹介されています。

現実の世界では、選挙で誰を選ぶかなど、集団としての決定を行う場面が多々あります。自分たちのことを自分たちで決めるわけですが、それによって社会制度が出来上がっていくわけです。この本では、集約ルールの話からはじまって、こうした社会の在り方についても考えさせられる内容になっています。私にとっては専門外になりますが、こういう研究分野もあるのかと非常に興味深く感じた本です。